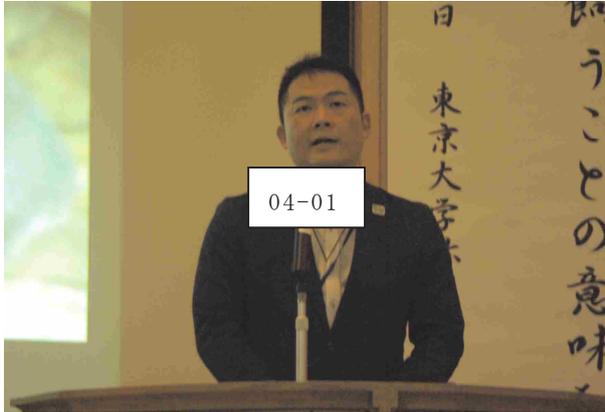


シンポジウム

「学校で動物を飼うことの意味を改めて考える」

渋谷 一典（文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官）



文部科学省の教科調査官として、生活科の学習指導要領作成にかかわった立場として、「学校で動物を飼うことの意味を改めて考える」という機会をいただき、改めて考えてみました。

今回の学習指導要領改訂では、いくつか大きなポイントがあります。その一つが、育成を目指す資質・能力として、三つの柱が示されたことです。三つの柱は「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」です。このことに伴い、各教科等の目標や内容もすべて整理されています。

学習指導要領は、いくつかの章に分かれます。第1章は「総則」で、すべての教科等にかかってくる大本です。この総則で、「児童が生命の有限性や自然の大切さ、主体的に挑戦してみることや多様な他者と協働することの重要性などを実感しながら理解することができるよう、各教科等の特質に応じた体験活動を重視し、家庭や地域社会と連携しつつ体系的・継続的に実施できるよう工夫すること」が示されています。

また、学習指導要領解説総則編の付録には「生命の尊重に関する教育」の一覧表

が掲載され、教科等横断的な教育内容であることが明示されました。その中でも特に深く関わっているのが、生活科や理科、特別の教科道徳、特別活動と考えることができます。

低学年教育における重要な役割を担う生活科では、指導する内容(7)「動植物の飼育・栽培」に関する規定があり、動物を飼ったり植物を育てたりする横断的・総合的な学習活動を通して、資質・能力の育成を目指した指導が行われることとなります。

私が参観した授業の中から、埼玉大学教育学部附属小学校の横田教諭の「生きものとなかよし」の実践を紹介します。2年生の横田学級では、教室の中でウサギをケージに入れて飼っています。この飼育活動は、「みんなで飼いたい動物を決めよう」と話し合った結果、ウサギに決まったことが発端でした。子供たちは、校地内にある「どうぶつ村」と名付けられた大きな飼育舎から3羽のウサギを教室に連れてきて、「ショコラ」「ミルキー」「くり」と名前を付けて飼育を始めます。

学習指導要領の内容(7)に基づき、飼育活動を通して三つの資質・能力を育成するために、指導者である横田教諭は三つの工夫をします。

一つは、飼育の様子を時系列で可視化したものを教室の中に掲示したり、飼育日記を皆で見られるようにしたりして、飼育活動の足跡をいつでも振り返ることができるようにしたことです。



活動を時系列に可視化した掲示

二つは、毎日行う朝の会の中に、ウサギとの触れ合いで気付いたことを表現するコーナーを設け、お世話に関する疑問や発見を日常的に交流できるようにしたことです。

三つは、外部リソースの活用です。PTAの副会長を務める方がちょうど獣医師だったこともあり、ウサギに関するいろいろとお話を聞いたりしながら、専門的な知識を取り入れることができました。

このような工夫を行いながら飼育活動に取り組むことで、子供たちにとってのウサギの存在がどんどん深くなっていきます。

私が参観した場面は、3年生に進級することに伴い学級が解体されることに伴い、飼育していたウサギの居場所をどうしたらよいか、という授業でした。子供たちが出した案は、

- ① 3年生になっても飼育する
- ② 1年生に引き継ぐ
- ③ どうぶつ村に返す

の三つです。それぞれの子供たちは、選んだ案に理由を書いた付箋を貼り付けながら、グループごとに話し合いを始めます。話し合いは白熱したものでした。1年間、ウサギとの関わりを存分に深めてきたのですから、皆真剣になるのは当然です。



獣医師から世話の仕方を直接学ぶ子供たち

そんな子供たちの中に、どうぶつ村に返す案を選んだ少数派の児童がいました。理由は、「どうぶつ村に返すことはとても自然なこと。教室よりも広い場所なのでストレスがたまらない。」というものでした。多くが自分の気持ちをもとに考える中、この子は、ウサギの気持ちになって考えていたわけです。子供たちは、ウサギの立場になって考えるとそう簡単には決められないことに気づき、結論は次の授業に引き継がれていきます。

日常生活の中で自然や生命と触れ合い、関わり合う機会がますます乏しくなる中、長期にわたる飼育活動によって、子供たちが生き物への親しみをもち、生命の尊さを実感することには大きな意義があります。横田実践のように、飼育活動を通して期待する資質・能力を育成するには、子供たちが自分との関わりで飼育動物を捉えられるようになるための教材化が重要です。先述した三つの工夫は、飼育活動を充実させるためのポイントと考えることができます。

その際、動物の飼育に当たっては、管理や繁殖、施設や環境などに関する配慮が欠かせません。学校として、専門的な知識をもった獣医師などと連携できるような環境や体制を整え、子供たちによりよい体験を与えられるようにすることが大切なのだと思います。